



明石市立
文化博物館

文化博物館だより 第169号

2007年6月22日

みなさん、こんにちは。今日は1階のふたつの展覧会のご紹介です。ひとつは小原実知成展。もうひとつは「博物館だより」初登場の江田誠郎展です。

● 第4回 小原先生に聞きました。

今回は前回の続き。小原先生の表現スタイルを変える事件についてです。

小原先生の作品によく登場する横たわるミイラ像。小原先生はメキシコ旅行中に、死や骨が日常の中にあることに衝撃を受けたそうです。ミイラ館では、子供もミイラを怖がらずに見つめていたそうです。



「アコーディオン」(1998年)

また、この姿にはもうひとつの意味が重なっています。小原先生の弟さんは舌癌で亡くなったそうですが、

(部分)

食事ができないためにたいへん痩せてしまったそうです。小原先生はミイラ館で見たミイラに、亡くなる前の弟さんの姿が重なって見えたそうです。ミイラ像の下に記された数字。これは弟さんの生きた年代を示しています。



「アコーディオン」(1998年)(部分)

よく登場するモチーフとして、アコーディオンを弾く盲目の男性像もありますが、これもメキシコの街頭での出会いがきっかけになっています。膝にはさんだバケツにお金を入れる音がすると、嬉しくて演奏をしていたそうです。

● 小さな展覧会 江田誠郎展「薩摩鶏百態」

体験学習室の隣の「小さな展覧会」会場にて江田誠郎展「薩摩鶏百態」を開催しています。小さな展示室ではありますが、足を開いて雄雄しく立つ姿や、鋭い眼光、走る躍動感など、薩摩鶏のもつ誇り高さ雰囲気は一見の価値あります。6月24日(日)まで開催しています。



「鶏」

小原実知成先生も江田誠郎先生も明石にご縁の深い方ですが、画風も題材も全く異なります。展示室の雰囲気も異なります。